

2018 6/12

No.2068

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



県内を流れる早川、酒匂川、相模川、多摩川などで今月1日、アユ釣りが一斉に解禁され、この日を待ちわびた太公望らが各河川に繰り出した。漁期は10月14日まで。



contents

視点・点描 3

指導者の資質とは

講演録

急変する朝鮮半島情勢／
南北一米朝首脳会談の展望と評価 4
共同通信社元平壤支局長 磐村 和哉

経済 8

日本経済は今、どうなってる？
キーワードから実情探る

社会 10

観光業を日本の基幹産業に
田村長官、きさらぎ会で講演

国際 12

急速に進むデジタル化社会
デンマークの最新事情

企業最前線 14

家庭菜園の新規顧客掘り起こし
無料相談や共同企画を強化

くらし2018 16

白斑とうまく付き合おう

広告珍談 18

広告はたのしい⑥⑤
君のほうがうまい

NNAアジア経済レポート 19

事務局だより

◇2018年7月定例講演会
2018年7月18日(水)
午後1時30分～3時
ロイヤルホールヨコハマ5階
「リビエラの間」
講師は皇室ジャーナリストの
山下晋司さん
演題は「天皇陛下のお気持ち
～退位が及ぼす影響」

視点 点描



指導者の資質とは

日大アメリカンフットボール部の悪質反則問題が大きな広がりを見せている。関東学連による処分は出たが、実際に反則がどのような指示によるものだったのか、当事者の明確な事実確認がないので、本当のところは分からない。

ただこの問題で、当該選手がある意味で被害者のように受け止められているのは、大学の体育会や

それに準じる競技スポーツにおいて「指導者の指示は絶対」という雰囲気が少ないからであるのを、多くの人が部活動などで実際に体験していることが背景にあるからではないだろうか。

スポーツの世界に、カリスマ性のある指導者は数多く存在する。その指導法はそれぞれ独特で、時として選手が異議を言いにくいこ

ともあるだろう。指導者に従っていくことが好結果につながることも、もちろんある。それでも強調したいのは、指導者、監督と選手の間には主従ではなく、あくまで対等であるべきだということだ。

長く第一線で活躍を続ける指導者に話を聞くと、多くの人が「選手に歯向かわれたこと」を指導の転機に挙げる。結果を求めるあまり力が入っていく中で、ある日、選手が「これではついていけない」と言い出す。そこで指導者が自らの独善に気付くのは、指導のための指導ではなく、競技力の向上、そして人間性の向上というスポーツの目的が二の次になっていないからで、指導者と選手はその目的、原点の下で対等なはずだ。

実績を積み重ねてきた指導者ほど、おごりが生じる危険性は高い。また組織が大きくなるほど、指導自体が目的化してしまう可能性も

大きい。競技を問わず、指導者には選手との関係が一方通行になっていないか、日々自らに問いかけてほしいし、それができるのが指導者としての大切な資質だ。そして競技者も、難しいことかもしれないが、受けている指導が納得のいくものなのか、自分の頭で考えることをやめないでほしい。

日大の問題は、大学スポーツのあり方、そして大学そのものの体質にも疑問の声が上がるほど広範に影響が出ている。学校運営の中核にスポーツを置く大学や高校は少なくなく、もはや大学体育会の中の特異な話ではおさまらない。改めて問題の原因究明と再発防止を求めるのももちろんだが、同時にスポーツに関わる全ての人たちに、原点を見詰め直していただければと思う。

(神奈川新聞社運動部長

和城 信行)

君のぼうがうまい

ロンドンに滞在する漱石は、やたら下宿を代えての2年半。水彩で絵ハガキを描き、あちこちに送った(その一部が5月、福井で発見されて話題になった)。熊本第五高等学校での教え子・橋口貢(のちに外交官)あてもあった。1902(明治35)年12月、帰国した漱石に、貢は、実弟清(雅号は五葉)を引きあわせた。清は東京美術学校西洋画科の学生。漱石は彼の画才をみこんだのだろう、ほとんどの著書の装丁をまかせた。

『我輩は猫である』は、雑誌「ホトトギス」に連載された。雑誌を主宰する高浜虚子に推薦され、清も担当した。漱石は友人・寺田彦彦にこう書いた。

「橋口の挿絵は特長がある、無暗に他の雑誌杯に載つて居ない。あれはたしかに橋口の画で他人の画ではない。僕は非常に感服した。僕の文章よりもうまい」。然し僕の猫伝もうまいなあ。天下一品だ」。猫伝は単行本になった。装丁は橋口清、図右である。

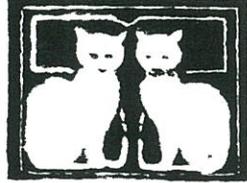
連載とはがらりと変わった。きびしく評価することで知られた内田魯庵は、「其内容と云ひ外観と云い二つながら申分なき近来の佳著」と賛美した。

11(明治44)年、三越呉服店(のちの百貨店三越)は、美女をテーマにしたポスターのデザインを懸賞募集。応募した清は、みごと一等賞を獲得した。

2年後の13(大正2)年、日本郵船のポスターを描いた。図左である。そのころ流行ったヘア・スタイルに、大きなリボン。きも

の柄はカキツバタ、帯は鳳凰。1914年のカレンダーを手に腰掛けている。水鳥にサカナの壁紙は、漱石から学んだのであろうアール・ヌーボー風。はなやかな内装の船内のラウンジか、窓からジャンクが見える。香港に停泊中という設定か。

画面下に横浜を起点とした「欧州線 二週一回、北米線 二週一回」、日本郵船の航路。「汽船数九十隻、総噸数四十万噸」とほころしげ。



日本郵船が若い画家・清にポスターを委嘱したのは、次兄橋口半次郎の関わりと思える。半次郎は東京帝国大学工科大学の造船学科を卒業、日本郵船の造船設計技師であった。身体が弱く、海外へ行けなかった清。欧米出張の半次郎から送られてきた絵ハガキを参考にして描いただろう、《米国航路案内》というガイドブックや、船内メニューもデザインした。

漱石は、15(大正5)年12月、49歳で他界。絶筆まで清がデザインした。原稿用紙とインク壺を愛用したという。それから5年後、清は流感をこじらせて逝った。41歳であった。

(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住)

(図右) 橋口五葉装丁による『我輩は猫である』。茅ヶ崎図書館蔵

(図左) 橋口五葉デザインの日本郵政ポスター。日本郵船歴史資料館蔵

◇ 広告珍談は今回で終了します。